

前方後方形墓・方形墓群の構成に関する一様相

－本庄市域周辺の場合－

利根川 章彦

1 はじめに

東日本の前期古墳については、東海系の前方後方墳が卓越して築かれた地域が多く、一定期間の継続の後に前方後円墳に交替する、ということが常識的に語られてきた。その一方、各地の調査の進展により、むしろ最初から前方後円墳が築造される地域もあれば、円墳が最初で、その後、前方後円墳が造られる地域もある。

しかしながら、埼玉県地域においては、弥生時代からの墳墓群の連続的側面を考えるならば、方形周溝墓の築造が弥生時代から古墳時代前期後半まで続いている小地域が多く、これらを首長墓の形成とどのように関連付けて考えるべきかが、古くから問われてきたと考えてよい。

筆者も、そうした研究動向の末端にいて、古墳時代初頭になってから埼玉県域に出現する、いわゆる「前方後方形周溝墓」⁽¹⁾と、周辺に展開する方形周溝墓群の様相について、埼玉県内各地及び周辺の都県の検出例を検討しながら、周溝墓群の群在のパターンを6類型で提示してみた(利根川1996)。このときに参考にしたのは、田中新史氏が各地の小規模墳墓群を分析した結果として指摘された、「古墳時代を一貫して存在する」「飛躍しえない被葬者層群」が「古墳時代理解の基礎構成要素として、評価できる事実」(田中1984)である。

今回再論する契機になったのは、①いくつかの遺跡の未刊だった報告書の刊行、②前回の論文で取り上げた戸田市鍛冶谷・新田口遺跡、東京都北区豊島馬場遺跡の2遺跡の「方形周溝墓群」のうち相当数の遺構が「周溝を持つ低地性の住居跡」である(福田2014など)、と推定されたこと、③新たな「前方後方形周溝墓」を含む墳墓群の調査例が得られたこと、等々である。

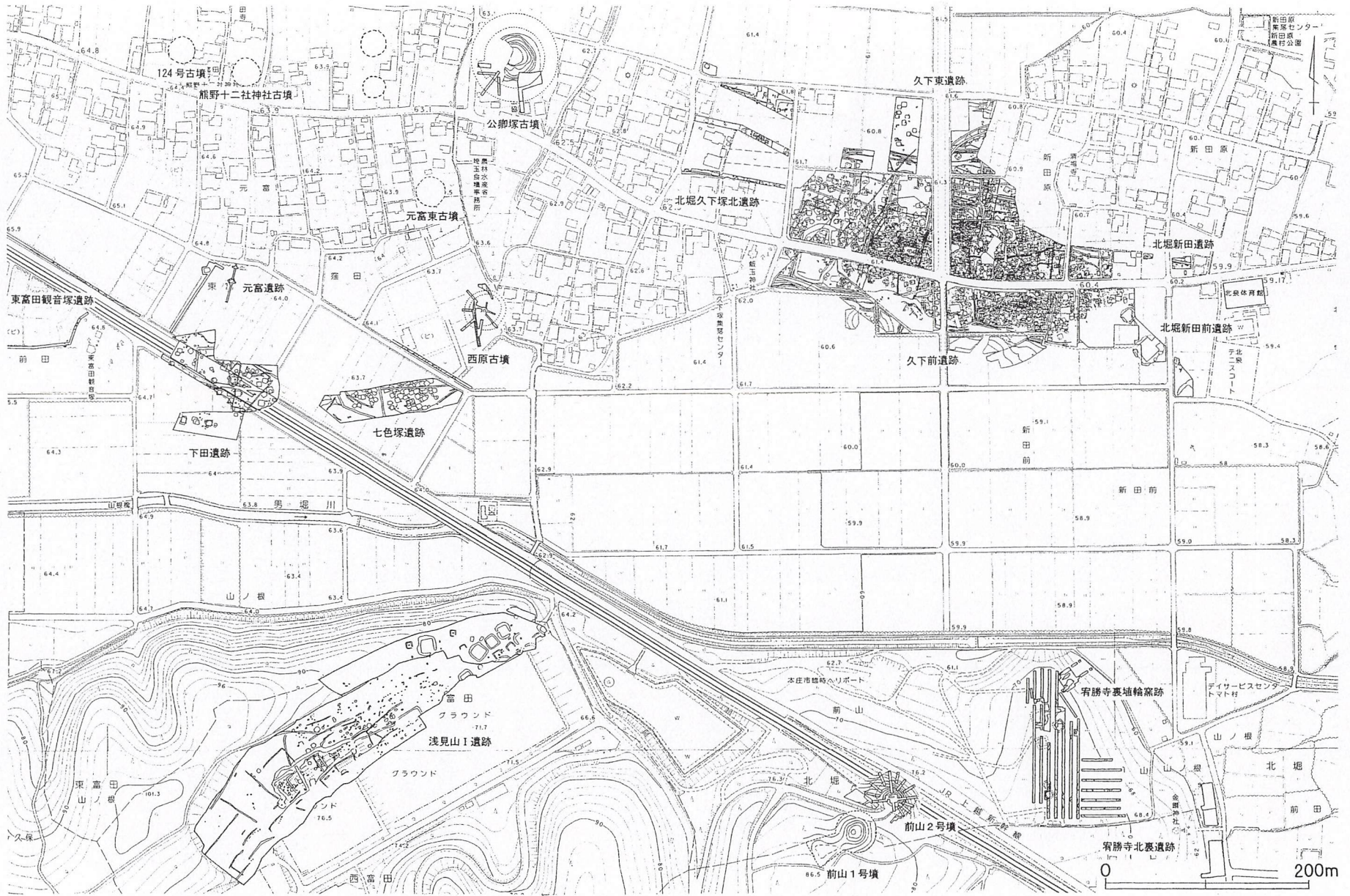
本稿の目的は、改めて古墳時代初頭の前方後方形周溝墓を含む墳墓群の実態を検討し、古墳築造の地域史的展開の中で如何に位置付けられるのか、小地域ごとに分析し直すことにある。

今回は上越新幹線の「本庄早稲田」駅が作られた大久保山丘陵北部とその北側の低地の遺跡群で発見された古墳時代初頭から前期末くらいまでの周溝墓群の分析を行うこととしたい。

2 大久保山丘陵北部と周辺低地の遺跡群

第1図として大久保山丘陵北部と丘陵北側低地帯の遺跡分布図を示す。上越新幹線の路線が本庄市の大久保山丘陵にかかる部分に「本庄早稲田」駅がある。この駅の北側の低地帯には新幹線路線に平行の方向に帯状の微高地がある。「本庄早稲田」駅周辺と北側低地帯の微高地には、古墳時代の遺跡が多数分布している。

集落遺跡としては北側低地帯に北堀新田遺跡・久下東遺跡・久下前遺跡・七色塚遺跡・下田遺跡などがある。墳墓群には、北側低地帯の駅直下あたりの位置に北堀新田前遺跡、丘陵上の駅東側に宥勝寺北裏遺跡、駅西側に浅見山Ⅰ遺跡、駅舎近傍に北堀前山古墳群、低地帯の西寄りに公卿塚古墳と円墳群がある。本稿で直接検討するのは北堀新田前・浅見山Ⅰ・宥



第1図 大久保山丘陵北部と北側低地帯の古墳時代遺跡分布

勝寺北裏の3遺跡ということになる。

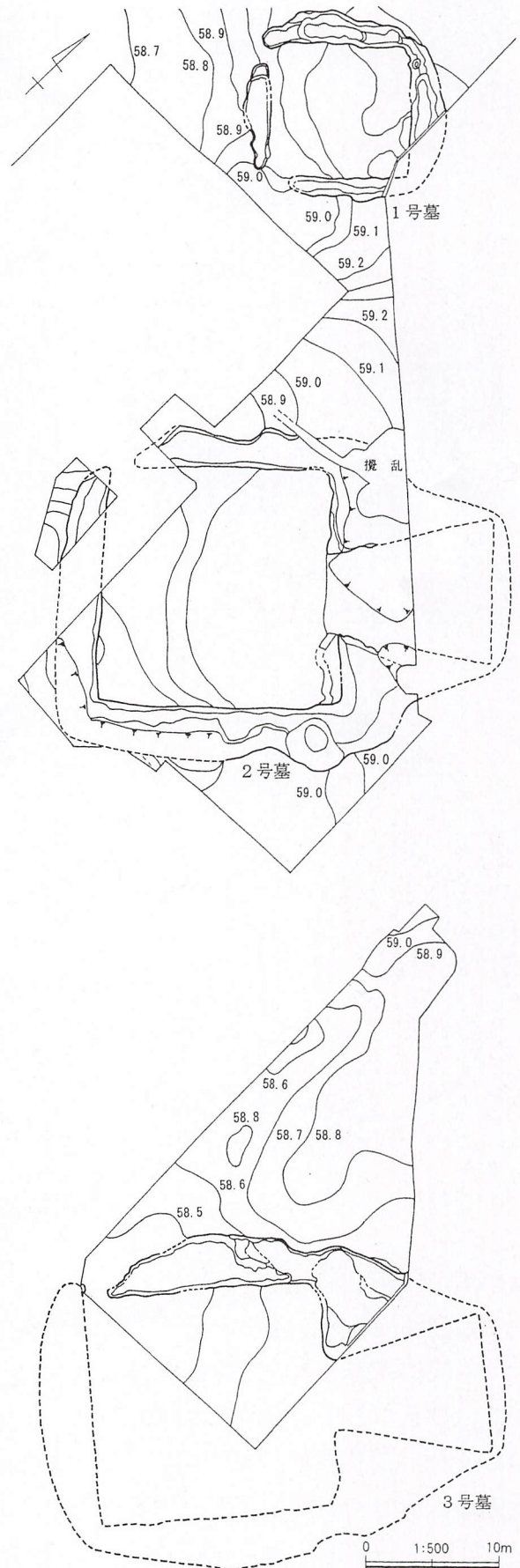
(1) 北堀新田前遺跡

この遺跡は「本庄早稲田」駅舎北方低地帯にあるが、発掘面積が狭く、周溝墓も3基のみ検出された。2号墓・3号墓は前方後方形周溝墓、1号墓は方形周溝墓であった。調査報告書には、報告者松本完氏による2号墓・3号墓の墳丘形態復元案が示されている(松本2015)。以下、報告書によりながら詳述する。3基とも墳丘盛土が残存していないし、埋葬施設も検出されていない。

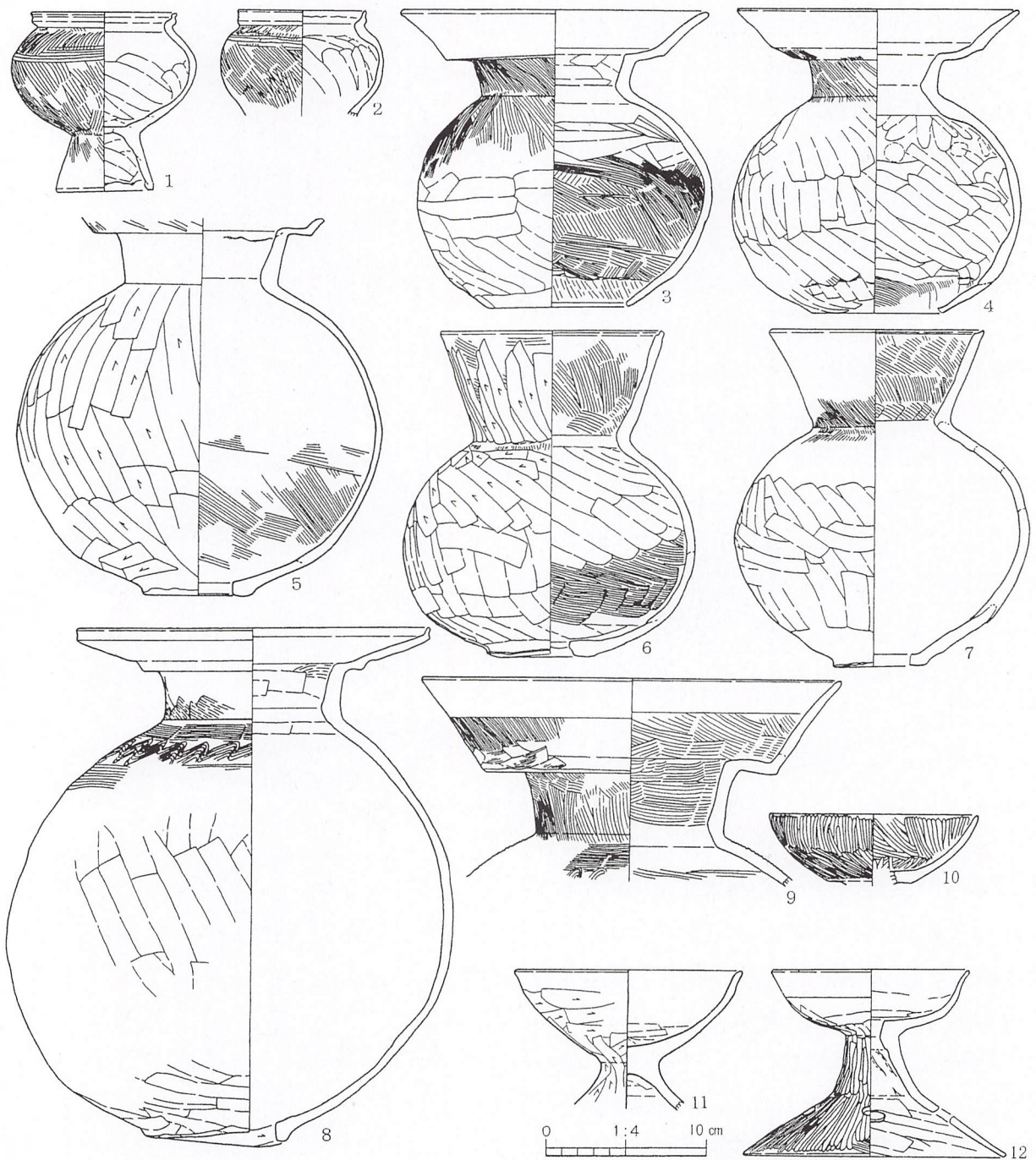
1号墓は、一辺約10mの正方形で、北東-南西の軸線、つまり、正方位に対して斜めであり、 $S-51^{\circ}-W$ である。西隅・南隅の2つのコーナーはブリッジで墳丘の内外がつながる。

2号墓は、1号墓西辺から南東約20mに位置し、後方部の方位は1号墓主軸方位とほぼ同じである。後方部の形態はわずかに歪んだ正方形で、辺の中央で測ると大略 $18\text{m} \times 18\text{m}$ だが、各辺で測ると、最小 16.3m 、最大 18.2m となる。発掘区が前方部途中までとなっているので、確認された前方部長は約 6m 、全長約 23m 分しか確認できていないが、松本氏復元によると全長約 29m 、前方部の長さ約 11m 、前方部前端部の幅約 11m である。

3号墓は、2号墓後方部西辺から約 40m 南東にある。後方部北西辺と西側くびれ部しか確認されていないが、後方部の南西隅が検出されたので、後方部北西辺の長さ約 18m であることは判明した。松本氏の復元案では、 $17\text{m} \times 18\text{m}$ のやや歪んだ正方形の後方部をもち、前方部前端幅約 10.5m 、前方部の長さ約 11m 、全長約 29m となって、2号墓とほぼ同じ大きさとなるようだ。後方部北西辺の方向は $S-53^{\circ}-W$ となり、1号墓・2号墓と



第2図 北堀新田前遺跡の前方後方形墓・方形墓

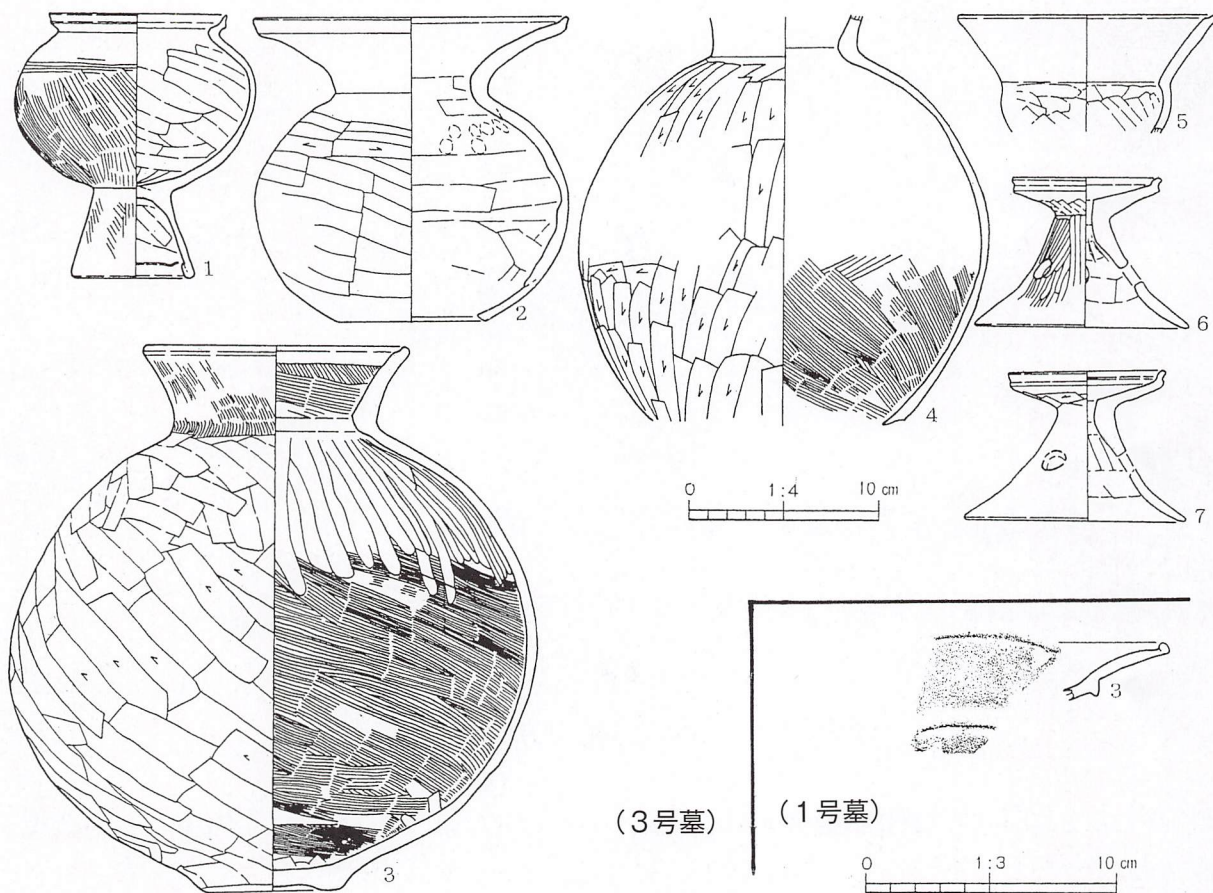


第3図 北堀新田前遺跡の出土遺物（1）（2号墓）

はわずかに異なる方向性を有する。

この3基の墳墓からの出土土器は、1号墓では二重口縁壺口縁部の小破片1点、2号墓からは二重口縁壺5点、単純口縁の壺2点、小型高坏3点、小型のS字状口縁台付甕2点が主体で、復元できない壺の破片も相当数出土した。2号墓の壺はほとんどのものが焼成前穿孔であった。3号墓からは、小型の単純口縁壺1点、球形胴・平底の中型壺1点、やや細身の壺1点、小型丸底埴1点、小型器台2点、小型S字状口縁台付甕1点がある。これらの土器から、松本氏は、墳墓の築造順序を1号→2号→3号と推定している(松本2015)。

しかし、気になるのは、3号墓の小型器台のスタイルが古相であること、2号墓の畿内型二



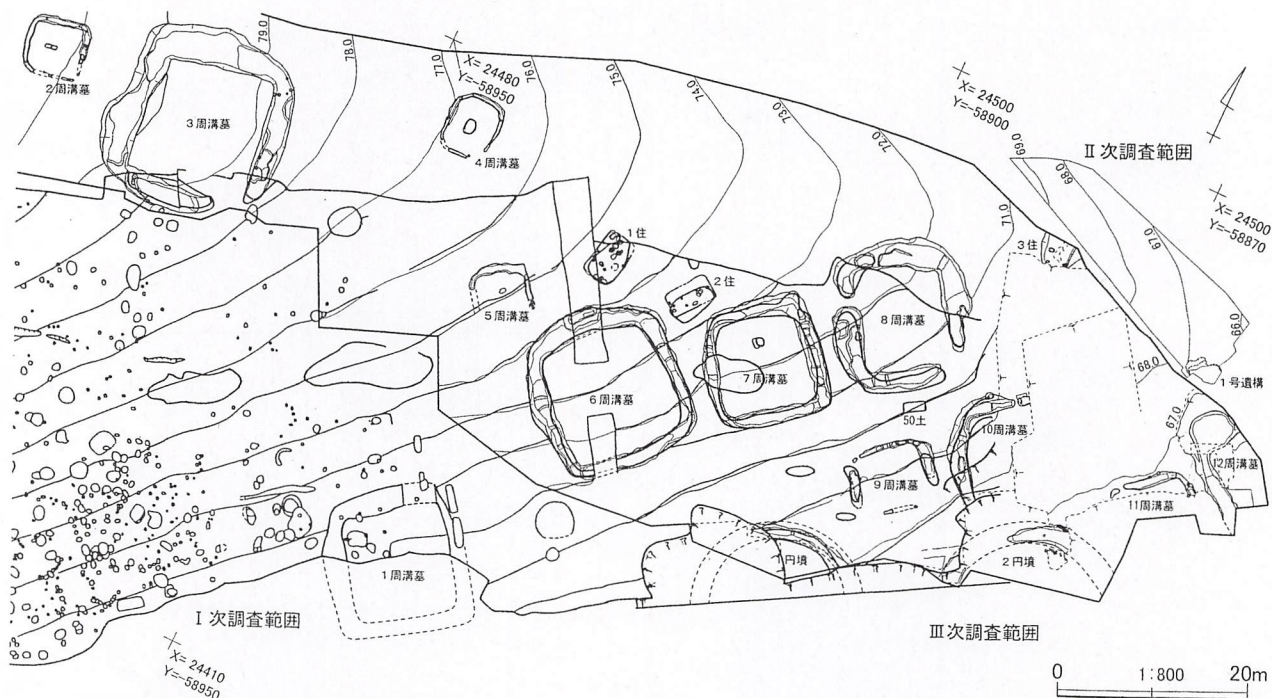
第4図 北堀新田前遺跡の出土遺物(2)

重口縁壺の頸が短く、擬口縁部より上方の外傾する口縁部の作りもきれいであることから考えると、2号墓・3号墓の年代差は小さく、1号墓の二重口縁壺も内面肥厚の口唇部を作出する技法から考える限り、2・3号墓との時間差は大きくない、と考えたい。すべて布留式(古)相のやや新しい段階の併行期にあって、あまり時間を置かず次々築造されたとみてよいのではなかろうか。3基の順序は2号墓→3号墓は正しいかもしれないが、1号墓が2号墓に先行するとはにわかに決められないのではないかと。筆者はむしろ、前方後方形周溝墓2基が先んじて造られ、方形周溝墓の1号墓に変わるという可能性もあるのではないかと考えている。

この周囲には、他に方向周溝墓が作られたかどうかは不明であるが、隣接する久下東遺跡の住居跡の出土土器の中に布留式(中)相～(新)相併行期の遺物が散見されるので、北堀新田前遺跡発掘区の南東に、それらの遺物の時期に対応する墳墓がまだ存在する可能性もある。

(2) 浅見山I遺跡

浅見山I遺跡は、「本庄早稲田」駅舎の東方にあり、大久保山丘陵北端部の北向きの緩斜面に所在する。しかも、方形周溝墓群が分布する領域は東に向かう傾斜もある。合計12基の周溝墓が確認されたが、3～4基が小支群のようなまとまりになっている。見かけ上はすべて方形周溝墓である。ただし、いちばん低い位置にある12号墓は、発掘区の東端にあるため全掘されていないので確実ではないが、北西側周溝幅が特別に幅広くなり、その部分の周



第5図 浅見山 I 遺跡の方形周溝墓群

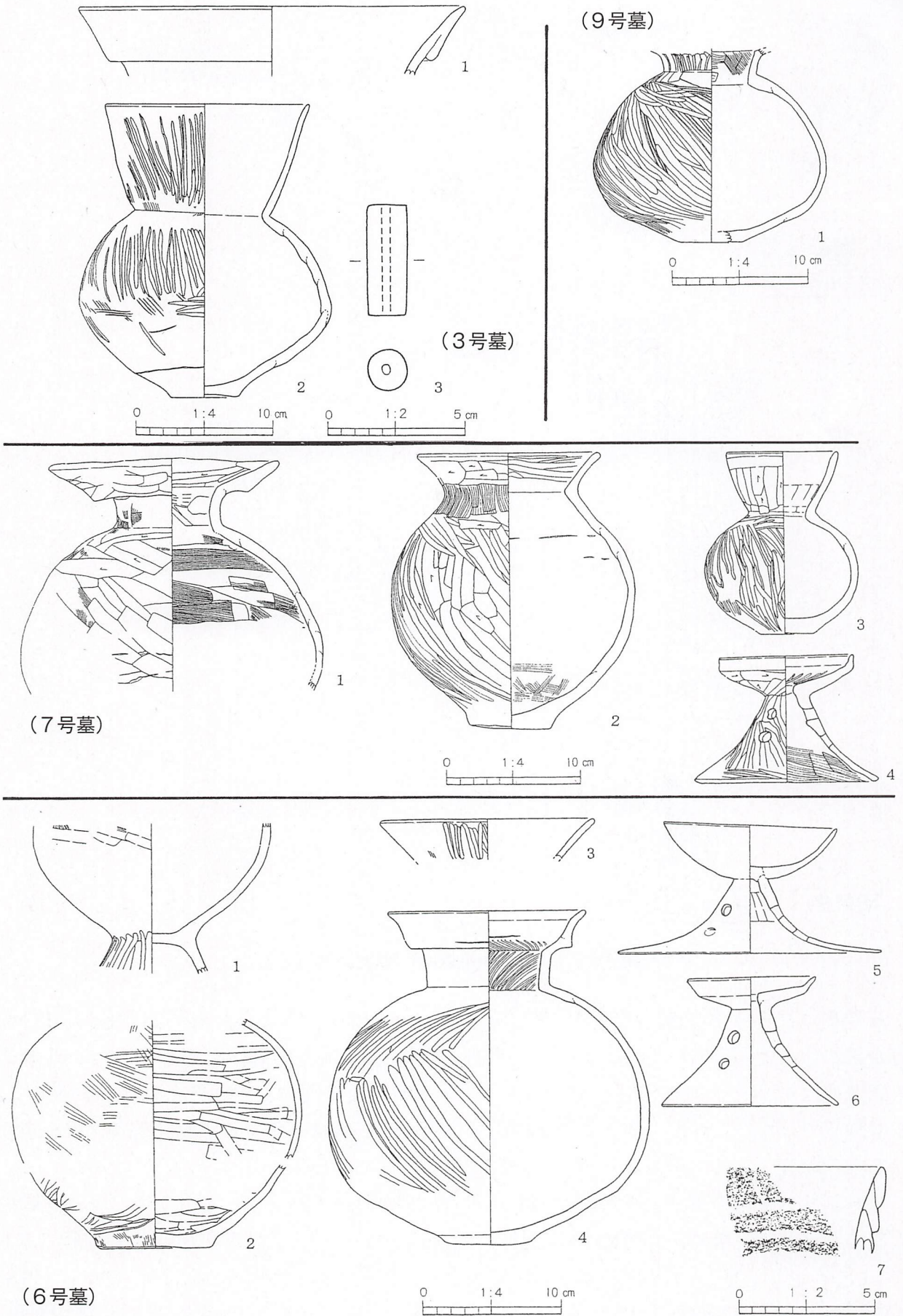
溝外側の立ち上がりの形態も丸くなっていること、別の調査区に連続する周溝らしい遺構が確認されていることを根拠に、この墓だけ前方後方形周溝墓の可能性があると考えられている。以下に個別の墳墓について述べる。

2号墓は、この周溝墓群の中で最も高い標高81.2mの位置にある。方台部は東西5.27m、南北5.40mの小型で、隅丸方形を呈する。南東隅はブリッジになっている。方台部中央に長さ1.38m、幅0.4mの長楕円形の土壇があり、主体部と考えられている。主軸方向はS-103°-Wで略東西方向である。出土品は、弥生後期の土器・土師器の細片のみである。

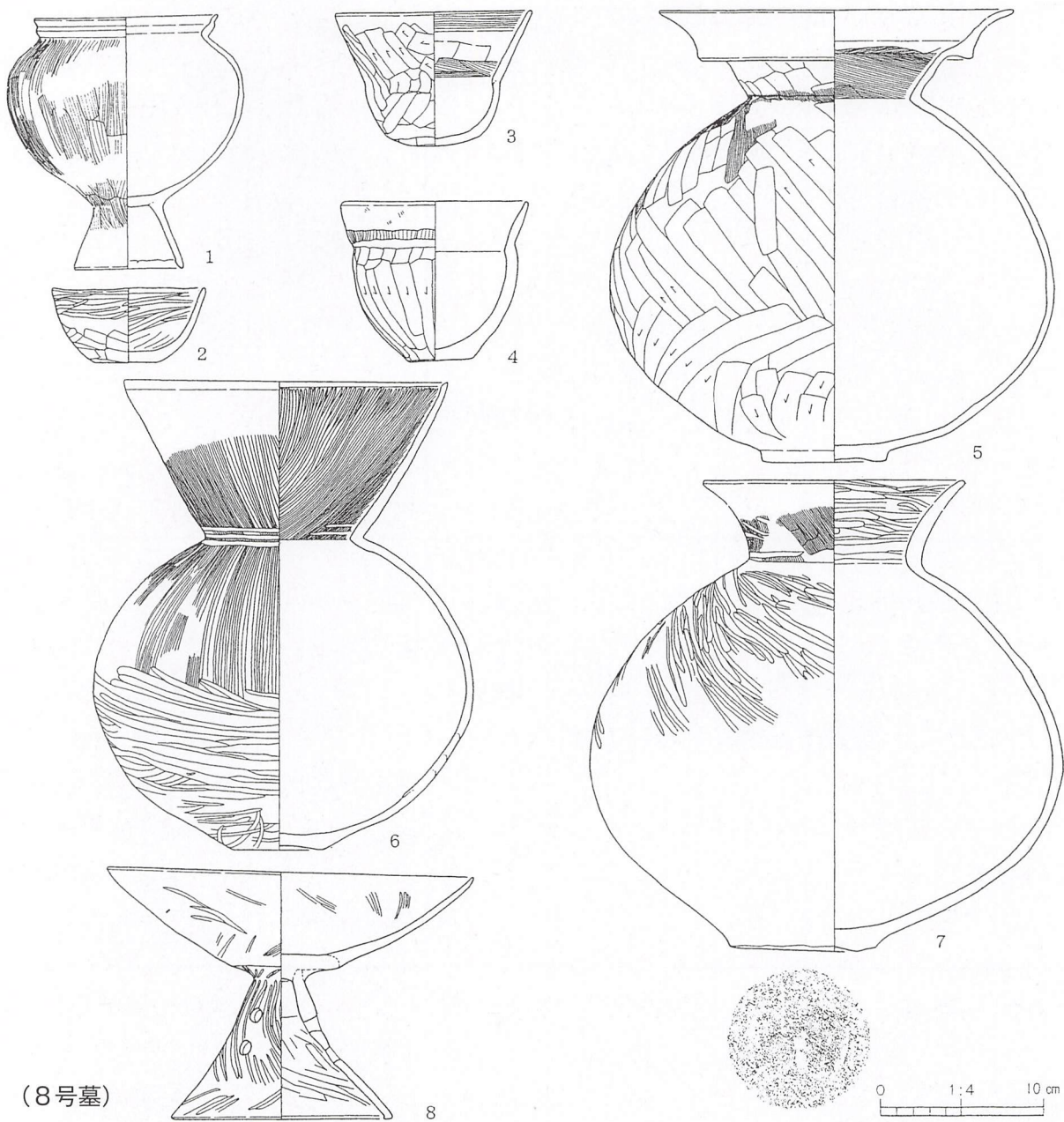
3号墓は、2号墓に隣接し、約5m東に位置する。方台部の大きさは、南北13.40m、12.50mを測り、南北にやや長い不正方形である。方台部には主体部は確認されなかった。2号墓は小型なので、周溝の幅は約60～80cmしかないが、3号墓はコーナー部の周溝の幅が約2m、各辺の中央部で4m以上となっていて、周溝の外側立ち上がりが辺の中央で膨らみ気味になっている。南東隅はブリッジになっている。周溝の各辺には深く掘られた部分もあって、いわゆる「溝中埋葬」の可能性も考えられそうである。平底の直口縁壺と碧玉製管玉1点が確実に墓に伴う遺物である。

4号墓は、3号墓の東16mの位置にあり、隅丸長方形を呈しているが、各コーナーはかなり丸く、印象としては、楕円形に近い。方台部の大きさは南北5.93m、東西4.88mである。南西隅は平安時代以降の時期の土壇で壊されているが、南東隅はブリッジになっている。方台部の中央に長さ1.6m、幅1.22mの主体部が確認された。出土遺物は細片のみである。

5号墓は、周溝墓群全体のほぼ中央部にあり、8号墓までの4基は1つの支群となっている。西周溝の大半と南周溝が失われていて、方台部の大きさは北周溝部でしか把握できないが、5.23mである。主体部は長さ0.75m、幅0.44mの不整楕円形で、中央やや北東寄りにあった。



第6図 浅見山 I 遺跡の出土遺物 (1)



(8号墓)

第7図 浅見山I遺跡の出土遺物(2)

6号墓は、5号墓の南東に隣接して所在する。北辺がやや短く、正方形より台形に近い。方台部の大きさは南西-北東12.70m、北西-南東12.90m。周溝は全周しており、北西辺の周溝には第34号土壌が重複している。この土壌は縄文早期のものと考えられているので、埋葬施設ではない。北西-南東の中軸線方位はN-52°-Wである。この墓に確実に伴う遺物は二重口縁壺・高坏・器台などの土器がある。

7号墓は6号墓の東2mに隣接して所在する。見かけ上は6・7・8号墓の3基は比較的大型の周溝墓で、墳墓群全体の中央部付近に占地している。方台部の形態は不整形であるが、やや台形状を呈し、北西-南東方向がやや長い。大きさは、北西辺で8.93m、南東辺で9.86m、北西-南東の中軸線の長さ9.72mである。周溝は全周しており、周溝各辺には「溝中埋葬」を思わせる掘り込みや遺物の分布が見られる。周溝の西隅・南隅はわずかに狭くなっている

が、全体的には幅1.7m程度に広く掘られている。北西南東方向の中軸線方位はN-39°-Wである。方台部の北西寄りの位置に土壙2基が重複して検出された。西側の土壙は89cm×44cmの長楕円形、東側の土壙は長軸の長さ77cmの楕円形で、掘り込みの底面付近の覆土は周溝覆土と類似するようだが、埋葬施設特有の痕跡はない、とのことである。7号墓に伴う遺物は二重口縁壺・短頸の中～小型壺・直口壺・小型器台の4点がある。

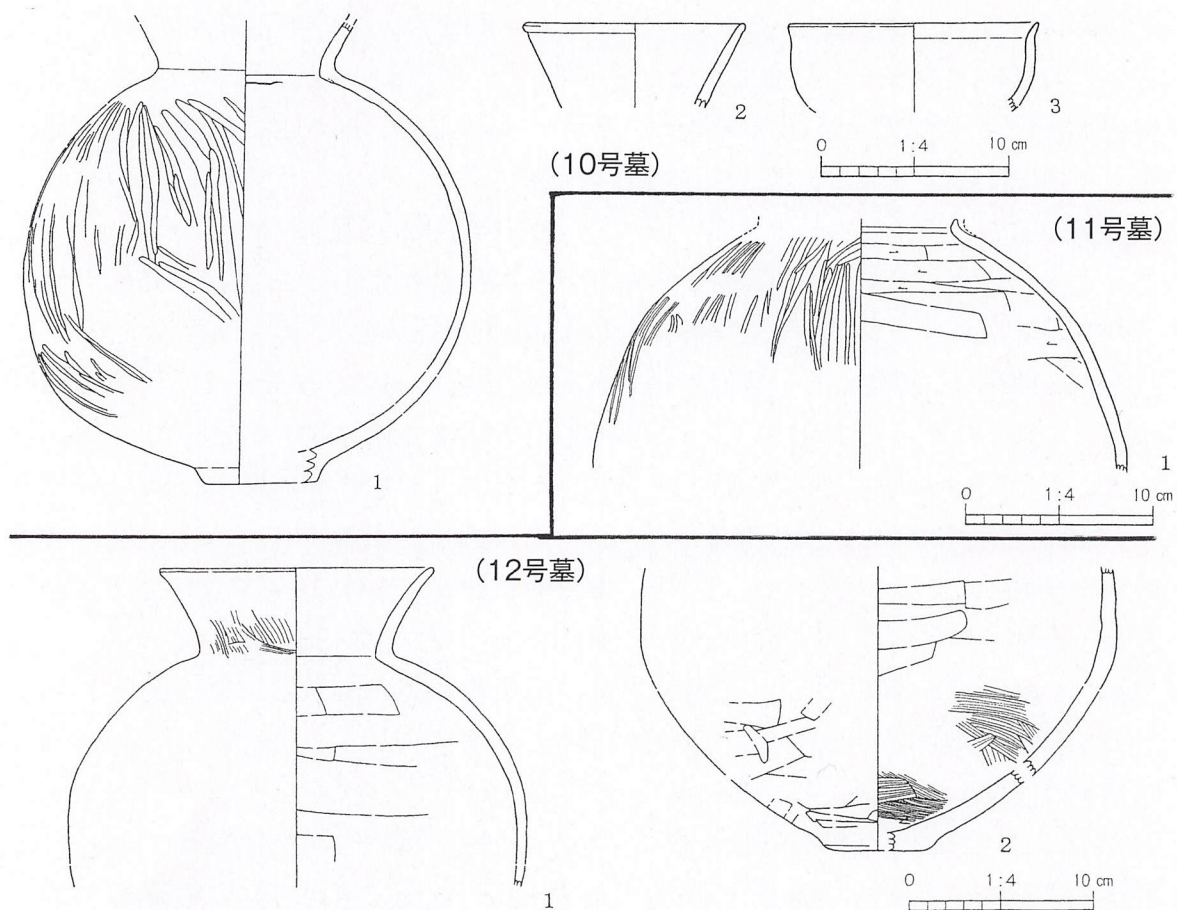
8号墓は、7号墓の1.3m東に隣接して所在する。周溝の南東隅と西溝の中央よりやや北西寄りの2か所にブリッジがある。あるいは「前方後方形周溝墓」への志向性を考えるべきかもしれない。周溝は、各隅は2m前後の幅であるが、各辺中央は3mを越えるくらい幅広く、外側に膨らむように掘り込まれている。「溝中埋葬」が行われたことも十分考えられよう。方台部の大きさは北西-南東方向で10.7m、南西-北東方向で8.82mを測り、形態は不整形である。北西-南東方向の中軸線方位はN-35°-Wである。西溝のブリッジを挟んだ両側の周溝内から多数の完形土器が出土している。8号墓に伴う土器はS字状口縁台付甕・直口壺・単口縁壺・高坏・鉢(2点)・小型丸底壺と二重口縁壺の8点であろう。

9号墓は、8号墓の南約5.2mの位置にあり、東側の10号墓、さらに東に連なる11号墓、12号墓と一群になると考えられる。方台部の形態は不整形長方形で、南東溝部分の残りが悪いので、確実とは言えないが、東・南・西の三つの隅部がブリッジとなっている。周溝の北西辺と北東辺はL字形につながる。方台部の大きさは北西-南東方向中軸線上で6.25m、北東-南西方向で7.12mであり、形態は不整形長方形である。北東-南西方向の中軸線方位はN-51°-Wである。北東溝、南東溝はやや幅広で、それぞれの最大幅は1.5m、1.3mであるが、北西溝、南西溝は最大幅70cm、50cmと細い。二重口縁壺が1点出土しているが、9号墓に伴うものと考えられることができる。

10号墓は、9号墓の東1.44mに所在する。東側の約半分は大きな攪乱で失われている。全形復元は困難だが、南西溝の最大幅2.3m、北西溝の最大幅2mという幅広の周溝を持つため、方台部の大きさが10mくらいの規模になる大きめの周溝墓であることは明らかである。北西溝にはブリッジがあるが、この辺の中央近くにあったとすれば、「前方後方形」への志向性が考えられる。南西溝内には「溝中埋葬」かと思われる土壙がある。単口縁の壺1点出土しており、この墓に伴うとみられる。

11号墓は9号墓の東18mほどの位置に所在する。間に10号墓が入るので、10号墓の大きさを、仮に10m四方とすると、この2基の墳墓の間には2~4m程度の距離があったことになる。北西溝はおおよそ残っており、北東溝との間のコーナーは確認されている。北西溝の南西端が少し湾曲しているので、ここを西隅と考えてよければ、8m程度の大きさはあったと考えられる。大型壺の肩部~胴部の大型破片が出土している以外は、土師器の細片しか出土していない。

12号墓は11号墓の東1mに隣接して所在する。この墳墓の所在地が発掘区の限界であるため、やはり推定であることは否めないが、隣接する第1次調査区の「1号遺構」という土壙状の掘り込みとその周辺が12号墓の北西溝の延長となる可能性があり、しかも、「前方後方形周溝墓」の前方部に相当しそうなのである。12号墓の周溝外縁は全体に丸みを持ち、波打つような曲線を描くが、方台部の2辺は直線的である。北西溝中央部にブリッジを持つように見

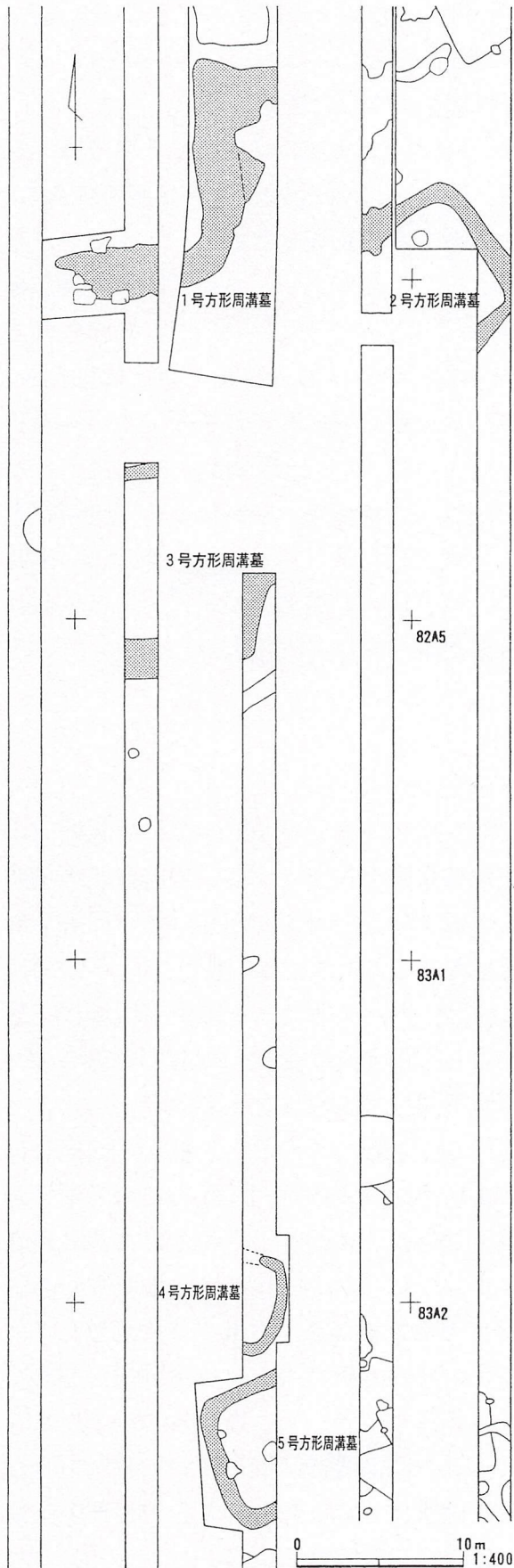


第8図 浅見山I遺跡の出土遺物(3)

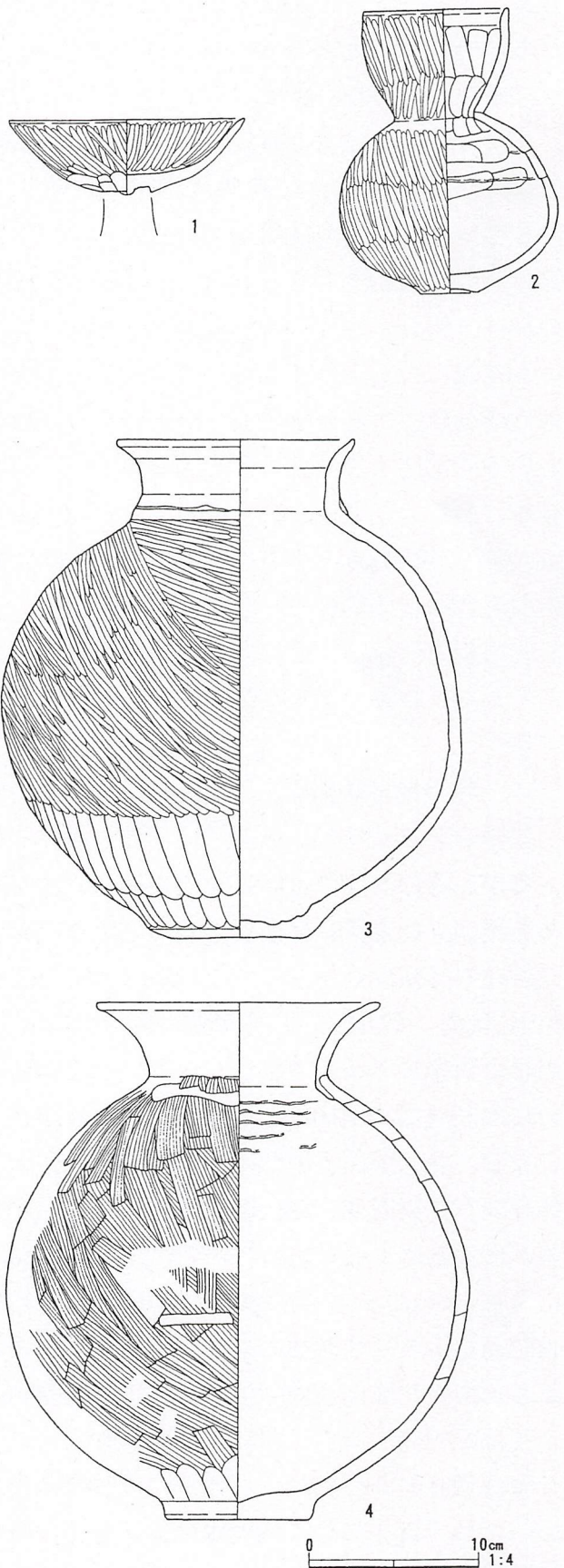
えるが、その南西側は特に周溝が膨らみ、ブリッジ部分は前方部状になる。報告書での推定復原値は、後方部の長さ約13m、前方部長約5.8m、全長約23.8mとしているが、後方部の大きさは10~12m、前方部長4~5m、全長15~17m程度として考えることもできそうである。「1号遺構」が前方部前端の周溝部分とすると、前方部北西隅がブリッジになって周溝が全周しない形態になるかもしれない。後方部側面となる南西溝(辺)の方位はS-57°-Eであるが、これは12号墓を「前方後方形周溝墓」と考えた場合の中軸線方位に近似する、と考えることができる。周溝から壺2点の大きい破片が出土しており、12号墓に伴うものと考えられる。

なお、直接周溝墓群に関連するかどうかはわからないが、8・9・10号墓のすきまになる空間に埋葬施設の可能性がある土壇1基が確認されているが、墳墓群の造墓活動の細部に立ち入る問題になるので、本稿では触れない。また、1号墓(早稲田大学調査)に関しても2~12号墓の3~4群のまとまりから離れて孤立してしているため、今回の検討対象にはしないこととする。

浅見山I遺跡の周溝墓群は、あまり多くの出土品が得られておらず、今回対象分でも8号墓の8個体が最多となる。古墳時代前期後半の周溝墓群では土器供献が低調であることは、この地域ではしばしば見受けられる。そうした状況を踏まえて考えると、この墳墓群の造墓開始が前期後半を遡らないことは明らかであろう。出土土器を中心に周溝墓群の推移について若干考えておこう。



第9図 宍勝寺北裏遺跡の方形周溝墓群



第10図 宍勝寺北裏遺跡の出土遺物

群が3～4基ずつの群として把握できそうなことは前述したが、調査報告書では、2～4号墓をA群、5～8号墓をB群、9・10号墓をC群、11・12号墓をD群として考え、3・7・9号墓→6・10号墓→8・11・12号墓という3期の変遷を想定している（松本2009）。この三段階説はおおむね認めてよいと思うが、いくつか考慮すべきことがある。

まず、二重口縁壺である。8号墓の二重口縁壺は「伊勢型」であるのに対して、7号墓・6号墓の二重口縁壺は「畿内型」の変容したものである。これらで新旧を決するのは困難である。7号墓→6号墓の前後関係を見ることができるのは小型器台の長脚化であり、7号墓→8号墓の新旧は「埴」として考えられる器種の大型化が考えうることである。また、壺形土器各種の胴部下膨れ形態から球胴化への視点からは9号墓→7号墓→6号墓→10号墓→12号墓という変遷になりそうである。これらの土器の変遷を三期に整理するのは正しいとは思いますが、他の墳墓群との大きな比較の視点からは、土器全体の様相が次第に東海色を失っていく過程という考え方もできるのではないかと。そうすると、8号墓と11・12号墓は一時期違う、と見ることができよう。この場合、11・12号墓は布留式(新)相併行期、それ以前の三段階が布留式(中)相併行期となり、前述した北堀新田前遺跡の周溝墓群より一段階新しく、この遺跡の周溝墓群全体が展開していることになる。しかも、前方後方形周溝墓が先行すると思われる北堀新田前遺跡に対して、浅見山I遺跡は最終段階によりやく前方後方形に転換していくと考えられることが興味深い。

(3) 宍勝寺北裏遺跡

宍勝寺北裏遺跡は、浅見山I遺跡の東方約500mの位置にある。約100m西には北堀前山古墳群がある。この遺跡の北側の斜面には宍勝寺裏埴輪窯跡群が所在する。宍勝寺北裏遺跡の発掘調査は遺構分布確認のための試掘調査しか行われていないので、現在はまだ周溝墓群の所在の詳細はわかっていないが、5基の方形周溝墓があることまでは判明している（太田・松本2003）。しかも、この遺跡の周溝墓は北と南に群が分かれており、その中間区域は、地山まで到達している削平が行われていたため、本来ならば周溝墓が連続していて不思議のないこの区域は、現状では遺構が存在するかどうか不明な「空白地帯」になっている。

なお、北堀前山古墳群は、1号墳と2号墳があることがわかっており、上越新幹線建設に伴う調査で調査された2号墳は、その後の本庄市教育委員会の調査で一辺約30mの方墳である、と認識されている。1号墳も、かつては径30m程度の円墳と考えられていたが、現在は全長60～70mくらいの前方後円墳と考えられるようになった。これらは4世紀末から5世紀前半あたりの時期の首長墓として考えられるが、これまでにこの地域の首長墓として認識されてきた鷲山古墳・公卿塚古墳・金鑽神社古墳との関係性等については十分検討されたことはない。⁽²⁾

確認調査のみの制約はあるが、宍勝寺北裏遺跡の個別の周溝墓の状況について触れてみたい。なお、現在のところ周溝全体が確認できている周溝墓は1基もないので、方台部の規模や形態は推定となる。なお、周溝墓のナンバリングは北から行われている。

1号墓は、宍勝寺裏埴輪窯跡群の窯跡のうち、いちばん南に所在する5号窯跡の南西約20

mの位置にあり、南北方向の現存長が16.5mである。しかし、これは周溝と方台部を含めた長さであり、確認された方台部は東側に直角に折れて伸びていく部分があるため、東側に前方部を有する「前方後方形周溝墓」の可能性がありそうである。周溝のうち南溝の幅が約3m、前方部と考えられる「くびれ部」における周溝の最大幅約4mという規模も「前方後方形」と想定する理由である。もし、そうだとすると、後方部の大きさが一辺約26m、前方部の長さ8m程度までの大きさは想定することができよう。

2号墓は、1号墓の東約5mの位置にある。1号墓がほぼ東西方向を主軸としている可能性があることに対して、2号墓は50°程度の角度で東に振れているため、北東溝の方向の一辺が約8mになることがわかる。周溝の幅は80cmから1.4mくらいあって、コーナー部はやや細めである。削平や攪乱のせいかもしれないが、北西溝には不自然な乱れがある。北西辺の長さがわからないので、8m四方程度の規模の方形周溝墓と考えておきたい。

3号墓は、1号墓の南約10mに位置する。北溝・南溝の確認の状況から考える限り、1号墓と同様の東ないし北の正方位に近い主軸方位をとる可能性がある。北溝の幅は80cm～1m、南溝の幅は約2.4mと、幅広の部分と細い部分の差が大きい。東溝の一部が外側に広がるのが気になるが、それを考慮しなければ、9m四方程度の規模の方形周溝墓と考えられる。

4号墓は3号墓の南約35mの位置にある。3号墓と4号墓の間の南北30数mの範囲が先ほど述べた「空白地帯」である。4号墓は小型の周溝墓で、東溝が湾曲しているため、正確な規模は読み取りにくいだが、一辺4～5m程度しかなく、周溝の幅も60～80cmである。

5号墓は4号墓の南1mの位置にあり、方台部の一辺6.5mくらいの規模になるが、形態が平行四辺形のように歪んでいる。周溝の幅は80cm～1m程度である。北寄りの3基がやや大きめなのに対して、南の2基は幾分小規模である。

出土品は少なく、1号墓から高坏、瓢形の壺、球形胴の短頸壺の3点、2号墓からは口縁部が大きく外反する壺1点が出土しているのみで、3～5号墓には図示できる遺物がない。

この4点の土器だけで時期を考えるのは困難かもしれないが、1号墓の3点のうち、高坏は小型高坏のカテゴリーと考えられ、瓢壺は平底であるがよく磨かれているようで、浅見山I遺跡との比較で考えてもやや古く考えられるものである。布留式(古)相併行期の新しい段階と考えておきたい。もう1点の広口壺に関しても時期を絞る材料とはしにくいですが、ミガキが密に入る点や胴の下膨れ傾向から見ると布留式(古)相併行期の中で考えた方がよいだろう。

2号墓出土の壺は、外反する口縁部が比較的長いのが気になる。胴部形態もあまり新しさを感じさせるものではない。ただし、胴部の調整に大幅にハケ目を残すのは新しい特徴と見られるので、むしろ布留式(中)相段階のものとして考えるべきかもしれない。

こうして考えてみると、浅見山I遺跡との違いは、墳墓群の築造開始がやや古い点、「前方後方形周溝墓」出現が古い段階にあることの2点ほどになり、周溝墓の規模等に関しては大差がない。丘陵部の2遺跡については、大筋で同じような造墓活動を行う集団が複数あった、と考えるべきかもしれないが、宥勝寺裏遺跡の造墓のパターンは北堀新田前遺跡と類似している。

3 大久保山丘陵周辺遺跡群の前方後方形墓・方形墓群の提起する問題

ここまで、北堀新田前遺跡・浅見山Ⅰ遺跡・宥勝寺北裏遺跡の3遺跡の墳墓群を筆者なりに分析した結果を少しばかりまとめておきたい。

3遺跡に共通するのは、前方後方形墓と方形墓の組み合わせになっていることくらいであるが、北堀新田前遺跡と宥勝寺北裏遺跡の2遺跡に関して言えば、前方後方形墓が先行して、方形墓が後続するという点も共通するかもしれない。

それに対して、浅見山Ⅰ遺跡だけは、最終段階である布留式(新)相併行期段階になってようやく前方後方形墓ができるようになる。北堀前山古墳群のような首長墓に結びつくのは、実は浅見山Ⅰ遺跡の周溝墓群なのかもしれない。

しかし、布留式(古)相段階の墓を含む2遺跡がむしろ大型墓から始まって、墳墓群自体の築造が進んでから小型化する傾向があるのはどのように考えるべきであろうか。

墳丘の長さあるいは直径が60mを上回るほど大型化した首長墓は、4世紀半ば頃と考えられる鷲山古墳を除くと、4世紀終末から5世紀初頭にかけての頃、さらにもう1段階新しい5世紀半ば頃まで下る時期にならないと出現しないのが、埼玉県地域の特に北半分の領域に通有の現象と考えられるが、布留式(古)相段階の前方後方形墓は大型墓とはいっても全長30mに達するのがせいぜいであって、この大型化の時期とは段階を異にしている。

そこで、筆者は、北堀新田前遺跡・宥勝寺北裏遺跡の墳墓群の変遷のあり方は、本格的な首長墓が出現する以前のパターンなのではないか、と考えている。

旧児玉郡の領域では、一般的な意味で五領(石田川)式期の集落は、弥生後期の樽式土器・吉ヶ谷式土器・赤井戸式土器などの垂流の土器に古手のS字状口縁台付甕や小型精製土器(小型器台・小型高坏等)、二重口縁壺などが組み合わさる時期[布留式(古)相併行期]から、次第に弥生系統の土器を失っていくプロセスをたどるが、五領式終末[布留式(新)相併行期]あるいはその次の和泉式初期段階に集落遺跡の再編があつて、新しい集落群が出現する。このポイントとなる画期において、「北堀新田前・宥勝寺北裏」型の集団は造墓を終了するのではないかと考えてみたいということである。

それに対して、浅見山Ⅰ遺跡は造墓時期が一段階新しいのであり、集落再編と関わりながら造墓全体が進行し、その結果、北堀前山古墳群のような首長墓群への成長を果たしているのではないかと対比的に考えてみたい。

もちろん、これを集落遺跡の展開の側からも考える必要があるわけであり、大久保山丘陵周辺低地帯の五領(石田川)式期の集落群の個別的様相を追求する、という次の課題も見えてきた。とはいっても、集落群の動態を考えるということは、墳墓群とは異なり、住居の重複のあり方や、大型住居と小型住居の組み合わせ、祭祀遺構や生産遺構との結びつきなど、実際にはクリアしなければならない問題は数多い。これらを含めて今後の課題として複眼的に分析するつもりである。

4 おわりに

前章で述べたように、大久保山丘陵周辺遺跡群における前方後方形墓・方形墓群に見る古墳時代前期の造墓活動の様相の分析から、一定の社会変革を果たそうとする集団の推移についての試論を提起してみた。また、今回のような展開のしかたとは異なる墳墓群の様相が見えた場合には、造墓活動のパターンを、前稿のように多くの類型から読み解く必要があるかもしれない。ローカリティで解決できそうな問題もあれば、一般化できにくい問題もあるので、数々の問題点を踏まえることによって埼玉地域の古墳時代前期社会の動態に迫るべく、今後とも迂遠な努力を続けていく所存である。

はなはだ中途半端であるとの批判は覚悟しているが、近いうちに、別の小地域に関する今回のようなモノグラフィックな研究を積み重ねることによって、埼玉の古墳時代前期社会へのアプローチを今後も続けることにしたい。

《注》

- (1) 「前方後方形周溝墓」という用語が適切かどうかは筆者はあまり意識的に述べたことはなく、ただ単に現象面での認識である。方形周溝墓一般と同様に盛土の高さが低いため、遺跡の表土除去作業や遺構確認時に、後方に存在したはずの主体部(埋葬施設)が飛んでしまって、確認できなくなることが多いのも方形周溝墓の発掘状況とよく似ている。埼玉県では、前方後方形墓は、明らかに盛土が認められる「前方後方墳」が決して多くはなく、いわゆる「方形周溝墓群」の中に「前方後方形」のものが混在して発見されるようになった1970年代後半の頃から、あたりまえのように「前方後方形周溝墓」の用語で発掘調査員も研究者も呼称することが普通になった。

本稿のベースとなる集団関係の見方の説明として引用した田中新史氏の論文では、一般的な方形周溝墓であって盛土が確認されていないものでも、古墳時代に造墓されたものについては、すべて「古墳」として扱われている。これは、発掘調査によって盛土が確認される古墳時代初頭前後の時期の墳墓群の多い房総地域を基準に考察した結果によるのではないかと筆者は憶測している。

あくまでも用語統一を図った方がよいとの学界での議論の収束があるのであれば、筆者もそれには従いたいとは考えている。しかしながら、現状ではまだ、現象面の把握は統一的な見解に結びついていないとは言い難い状況下にある。いくつか指摘させていただけば、古墳時代初頭前後には、長野県地域に「円形周溝墓」が卓越する地域があること、群馬県北部地域の礫床埋葬施設を持つ不整形・不整円形の周溝墓群の確認などである。ここ20年間くらいの発掘調査例の蓄積をもってしても、いわゆる「古墳出現期」の墳墓の形態、墳墓群の様相の認識がいまだに整理されているとは考えられない。

- (2) 古墳時代前期から中期の「首長墓」と認識されてきた旧児玉郡域の古墳には墳丘の全長(または径)40～60mクラス古墳が多く、北側に隣接する群馬県地域のような100m規模に達するような傑出した規模の古墳は見いだせない。具体的にあげておくと以下ようになる。大久保山丘陵の西のはずれの入浅見地区の丘陵上にある鷲山古墳(前方後方墳、4世紀中葉、全長約60m)、鷲山古墳と対峙するように西の丘陵端部にある金鑽神社古墳(円墳、5世紀中葉、径約67m)、生野山丘陵上の通称「生野山古墳群」に所在する物見塚古墳(前方後方墳?、5世紀初頭、推定全長約70m)、生野山75号墳(円墳、5世紀初頭、径42m)、生野山將軍塚古墳(円墳、5世紀中葉、径約60m)、生野山9号墳(円墳、5世紀後葉、径44m)、大久保山丘陵北側低地帯の微高地上にある公卿塚古墳(造出し付き円墳、5世紀中葉、全長70m)、南の志戸川流域の諏訪山丘陵西裾の台地上にある長坂聖天塚古墳(円墳、4世紀後葉～5世紀初頭、径約60m)、そのやや北方にある川輪聖天塚古墳(円墳、5世紀前葉～中葉、径38m)、諏訪山丘陵尾根上にある諏訪山古墳群の主墳である美里諏訪山古墳(帆立貝型古墳、5世紀後葉～末葉、全長39m)などがある。いずれにしても、古墳時代になってからはかなり「人口過密」であったはずの旧児玉郡地域造られたにしては全体的に規模が小さく、しかも、首長墓系列になるような小地域での継起的築造状況も見受けられない。本稿で簡単に触れた北堀前山2号墳が2基で連続して築造され、首長墓系列を形成しているように見受けられることは、旧児玉郡域の首長墓の展開全体においては数

少ない例外となるかもしれない。

かつて、丸山竜平氏が、琵琶湖北岸や西岸の丘陵部の中規模首長墓が、一定の小地域の中で年代を追って「持ち回り」的に最大規模の古墳を築造することに対して、「湖西型古墳群」という概念を与えた(丸山1976、丸山1977)。これと同じような現象を、旧児玉郡域の大半の小地域で見ることができるのであろう。

《引用・参考文献》

- 太田 博之・松本 完 2003 『宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏』 本庄市埋蔵文化財調査報告第26集
本庄市教育委員会
- 小久保 徹他 1988 『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳〔児玉〕』 さきたま出版会
- 田中 新史 1984 「出現期古墳の理解と展望－東国神門五号墳の調査と関連して－」『古代』第77号
早稲田大学考古学会
- 利根川章彦 1996 「前方後方形墓・方形墓群の構成－いわゆる「飛躍しえない被葬者層」の行方－」『埼玉
県立博物館紀要－22』 埼玉県立博物館
- 福田 聖 2014 『低地遺跡からみた関東地方における古墳時の変革』 六一書房
- 松本 完 2015 『北堀新田前遺跡Ⅱ(A2・A3地点)・北堀新田遺跡Ⅳ(A2・B地点)・久下東遺跡Ⅷ
(G3地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第44集 本庄市教育委員会
- 松本 完他 2009 『浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・B1地点・北堀久下塚遺跡北遺跡』
本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集 本庄市教育委員会
- 丸山 竜平 1976 「古墳と古墳群(上)」『日本史論叢』第6輯 日本史論叢会
- 丸山 竜平 1977 「古墳と古墳群(中)」『日本史論叢』第7輯 日本史論叢会